

140th
anniversary



二松學舎 松苓会報

CONTENTS

- P2 祝卒業 卒業生の皆さんへ
- P3 第13回 ホームカミングデー
- P6 教壇を去られる先生方
- P8 松苓会各支部活動報告
- P14 恩師からの便り
- P15 大学だより
- P17 松苓会の歩み (9)
- P18 沼南校舎開設時の四方山話
- P19 卒業生だより
- P20 会員からの便り
- P23 佐佐木鍾三郎顧問を偲んで
- P24 『武士が活躍しはじめた、その頃のお話。』 紹介
編集後記

No.59 2018年3月15日
二松學舎大学同窓会広報誌

祝卒業



二松學舎松苓会
会長
廣田 克己

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。
「二松學舎松苓会」(以下、松苓会)は卒業生の皆さんの入会を歓迎いたします。

卒業生の皆さんへ



二松學舎大学
学長
菅原 淳子

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。在学中の数々の思い出を胸に、二松學舎大学を巣立ち、新たな人生の扉を開こうとしていらっしゃる皆さん。皆さんは目の前に

「松苓会」は専門学校1期生の卒業とともに昭和6年に創設されて86年になります。卒業生は約3万人で、先輩たちは世界中の様々な分野で活躍しています。その活動は「ホームページ」や「松苓会報」を通してお知らせしますので、時々チェックしてください。

さて、まず申し上げたいのは、皆さんが卒業して最初にすることは、保護者の皆さんに感謝の気持ちを伝えるということです。皆さんを社会に送り出すまでの子育ては並大抵ではありません。その努力はやがて子育てをする年齢になった時に知るこ

ある様々な可能性を持った道を選ぶことも、また自ら道を切り開いていくこともできるのです。どうぞ自信を持って新たな一歩を踏み出してい

ただきたいと思います。

社会人となった時に、皆さんは大学で学んだ専門知識を必ずしも生かすことができないかもしれません。しかし、身につけた考え方や学びの技術を生かすことによって様々な分野で活躍することは可能です。皆さんがこれから生きていく時代は、変化の激しい時代、人工知能(AI)やロボット技術等を軸とする第4次産業革命の時代とも言われています。

とになるはずですが。子供を育て上げることは、人生の一大事業です。その保護者の皆さんが今日、節目を迎えたのです。最も祝いの言葉と感謝の言葉を受けるべきは保護者の皆さんなのです。

次に皆さんがすべきことは、これから飛び込んでいく場所で自分の居場所を一日も早く作ることです。社会はそれほど甘いものではないことはご存じの通りです。職場での居場所とは与えられるものではなく、自分で作るものです。また家庭人、社会人としての立場も同じです。これまでに学び、実践してきた力を大いに駆使してください。

いよいよ皆さんが自分の足だけで

す。情報が溢れ環境が急速に変化する社会に、柔軟に対応できる能力が必要とされていますが、皆さんどうぞ安心してください。在学中に学んだ専門的な知識はもとより、分野の枠を超えて身に付けた幅広い教養や知識によって、皆さんには高い汎用能力が備わっていると確信しています。また、サークルやアルバイト、あるいはボランティアなどの社会活動を通じて広げた視野や人間関係。それらの一つ一つが、これからの皆さんの人生の中で貴重な経験として必ず生きてくることでしょう。皆さんが社会人としての自覚と責任を持って、社会に貢献してくださることを期待しています。

歩む生活が始まります。当分は余裕などないと思いますが、時々大学に帰ってきてください。毎年実施される「ホームカミングデー」「名刺交換会」や各支部主催の総会、文学散歩、賀詞交歓会、また折に触れて実施される「同期会」「ゼミ会」「サークル会」等に顔を出してください。恩師や学友、先輩・後輩たちとの語らいは、きっと明日からの力になると思います。「松苓会」はいつでも皆さんを待っています。時間が取れない時でも松苓会との繋がりは作ってってください。

どうぞ身体に気をつけて、逞しく生きてください。

皆さんにとって、大学を卒業することは大学での学業の終了を意味しますが、決して学びの終了ではありません。むしろこれからが始まりであり、今まで学んだことを基礎に新たな自分の人生をスタートさせることになり、学びも続くことになるでしょう。卒業後の長い人生では、絶え間ないインプットそしてアウトプットが求められます。皆さん、どうぞ変化を恐れることなく、常に新たな知識を取り入れてください。

たくさんの可能性を持つていらっしやる皆さんの前途が希望に満ちあふれたものであることを祈って、皆さんに贈る言葉といたします。

第13回 ホームカミングデー

平成29年11月4日（土）、第13回ホームカミングデーが午前10時から開催されました。

本学卒業生に、在学生の活躍する姿や、今の学園祭の様子を知っていただきたいの思いから、例年、創縁祭（大学学園祭）の時期にあわせて実施しております。

今年度のホームカミングデーでは、たくさんさんのイベントを企画して、卒業生の皆さまをお迎えしました。

九段1号館11階エレベーターホールに開設した受付では、ポストカードや、本学の学生がデザインした、本学公式オリジナルキャラクター「ねこ松」が描かれたシャーパーンなど、二松學舎大学オリジナルグッズのプレゼントがあり、また、学園祭の出店で利用できる買い物割引券の無料配付もありました。受付が済み、カフェに模様替えされた会議室に進むと、コーヒーや茶菓子等が用意された交流サロン（懇親会会場）となっており、旧友との出会いの場として、また交流の場として、活況を呈していました。

さらに、会場には創立当初の校舎の様子を再現した模型を展示した他、創立140周年を記念して制作された映像や、漱石アンドロイドの製作過程の紹介映像、学生制作による新学科「都市文化デザイン学科」の紹介映像等を上映するコーナーを設置し、本学の歴史を辿ることができるスペースを設けました。また、「ねこ松」との記念撮影イベントや、「漱石アンドロイド」の展示も行い、卒業生だけでなく在学生も会場に足を運んでいました。当日は、出店の飲食を味わいながら思い出話を語る方、ご家族でいらっしゃった方など大盛況でした。

また、九段1号館地下3階を会場として、10月30日（月）～11月4日（土）の期間に開催された、「卒業生作品展」には書や写真、絵画など36点の出展があり、多くの来場者で賑わいました。

次回（平成30年度）のホームカミングデーも、多くの卒業生の方にご来場いただけるような様々なイベントを企画してまいりますので、是非ご参加いただきたと思います。

（実行委員 中嶋 剛）





ホームカミングデーに母校を訪 問して

赤羽利文(文34)

案内された漱石アンドロイドにガラス戸越に對面した瞬間、ジェームス・デイーンのアンドロイドを想起し、アクターズ・スタジオ・メソッドがAIに組み込まれたコメディイ調の舞台を夢想しました。

飯塚友一郎(劇文学)・内田泉之助(中国文学史)・石川梅次郎(孟子)・加藤常賢(中国哲学史)・萩谷朴(土佐日記)・中村俊定(芭蕉)・にこやかに楽しげに講義された秋山虔(源氏物語)等の諸先生方が思い浮かびます。その中で石川先生に関しては、茶道を嗜んでおられた事を石川先生の「仙樵居士の遺墨味読」(茶道之研究社)で最近知りました。大日本茶道学会会長田中仙翁氏は本学中国文学科出身(文21)ですが、それは仙翁の祖父仙樵の厳命との事で石川先生が及ぼした影響大なるものが有ったと思われます。

驚かされたのは那智学長で、羽織袴姿に加え出会った場所がトイレだった事で。当時は便器が個々ではなく、横長の溝への放出でしたので、共に用をするのを一瞬躊躇しましたが、一歩後れで並んで済ませました。

近年、都合が付き次第ホームカミング通いにいそしむのは、講義された先生方をなつかしむ場所として、怠惰で方向が定まらない手探りの時

期をいとおしむ場所・時として、再体験を希求しての事かもしれない。

卒業生作品展

赤枝美智子(文42)

平成29年度卒業作品展は10月30日(月)よりの開催でした。ちょうど上京の帰省日に当たり久し振りに拝観する事にしました。その会場は校舎の地下三階。荷物を松苓会事務室へ預け、身も心も軽やかに行くと、広い廊下の両壁面に大小様々な作品がバランス良く配置されています。写真、書、篆刻、水彩、粘土、根付、絵画等全て力作で、中でも象牙根付の緻密さに魅せられたのは私だけでしょうか? 出品者は北海道から鹿児島迄全国から。拝観していると励まされ次の出品意欲が湧きます。皆様もご出品され、観覧に是非いらして下さい! 隣の広い書道教室で熱心に書いている学生を見ると、昔日を懐かしめます。

さて、創立者三島中洲先師と同郷岡山出身故か、私は母校に愛情と誇りを持っています。そこで作品展には「参加に意義あり」との想いで、毎年小さな駄作(色紙短冊に書画)で、その時その折の心情を込めて初回より続けています。

今回の作品は「吉祥」(吉祥)。我が家で秋祭り前に禱元として神様のご来降の祭祀を執り行った事に拠る語句を認めました。

通常は、中国の七絃琴(正式名は琴、現代中国では古琴)を嗜む為、琴曲琴歌を題材にします。と言うのも、毎年秋に東京で重陽琴會があり、その弾琴曲と二松への出展作を合わせているのです。琴は日本の琴(正式名は箏)とは別で七絃。正倉院、法隆寺に伝わり、源氏物語、宇津保物語等に記され、琴棋書画(君子のたしなむ四芸)としても知られている、あの琴です。

古くは孔子の伝作詩作曲の琴曲「猗蘭操」があり、解釈が難しく石川忠久先生にお尋ねし、色紙に書く作品としました。又、江戸初期に水戸光圀に厚遇された明末僧東皐心越禪師の『東皐琴譜』に「富士」の琴歌が記載され、これは禪師が日本人の為に和歌に曲をつけたものです。(田子の浦ゆ…)これも、富士山の画に和歌を散らして色紙書きにしました。

蛇足乍ら、色紙作品で思い出されるのが、加藤常賢学長より卒業アルバムに揮毫された色紙を「アンタが受け取って下さいヨ!!」とお言葉：未だ果たせず鶴首しています。又『礼記』の書籍を下さった川久保廣衛先生、『教學相長』『數學半』を痛感する昨今です。

二松に学籍を置き、多くの方々とのご縁のお蔭で今があり、作品展にも出品できます。松苓会のご発展を祈念しています。



ホームカミングデーに参加して

野口悦子(文51)

ここ数年、娘が二松にお世話になっていたので創縁祭に行き、ホームカミングデーにも参加してきたが、今年は同期が上京し特別な一日となった。

私達が学んだのは建て替え前の校舎で、学生課のある1階の暗い通路から教室へ上がっていった。教室のイスは、木のベンチタイプで、よくストッキングがひっかかった。そんな事を思い出しながら、すっかり近代的になった1号館を歩いた。

学生当時、最上階は5階。現在は13階、ラウンジになっており、武道館の『金のたまねぎ』を見おろす事ができる！順に廻り、地下へ卒業生の作品展を見に行く。卒業年度順に展示されていて、知人の作品も探しやすい。一緒に行った同期は、なかなかいい名前を見つけ、思い出に浸っていた。

その後、4号館へ向かった。九段坂病院が無くなり、平安堂はりつばなビルになって、すっかり様変わりした道であっても、同期と歩いているせいか、気持ちだけは数十年前の学生に戻っている気がした。

まだホームカミングデーに参加していない方には、ぜひ一度足を運んでいただけたらと思う。驚き・淋しさ・懐しさ…、いろいろな想いに揺れるひとときになると思う。

学園祭とホームカミングデー

南雲ふみ(文82)

学園祭に遊びに行き、同時開催していたホームカミングデーにも参加しました。

二松學舎大学の公式キャラクター、ねこ松のグッズをもらえると聞き、それに惹かれて参加を決めました。もらえたねこ松のシャープペンシルはとても可愛く、職場で愛用しています！

訪れた時間に、ちょうどねこ松が遊びに来ており、一緒に写真をとっている人達の声でとてもにぎやかでした。ねこ松もサービスピ精神が旺盛でとても楽しかったです。

また、ねこ松だけでなく、会場にいた卒業生の皆さんも和気あいあいと交流をしており、とても素敵な雰囲気でした。

その他にも話題の漱石アンドロイドを間近で見ることができたり、学園祭の模擬店で使用できる割引券がもらえたり、ホームカミングデーに参加したことで、創縁祭をより楽しく過ごすことができました。

ホームカミングデーに参加して

金原和真(政22)

2017年11月4・5日にかけて開催された「創縁祭」に私は本学OBとして参加しました。

久々に訪れた校舎は感慨深いものでした。

大学を卒業して早2年。仕事の都合上、愛知県で現在は仕事しており、東京からかなり離れてしまいましたが、しかし、いざ訪れた九段下から校舎までの道のりに、良い環境で貴重な経験ができた学生時代だったと改めて感じさせられました。

ビル群に囲まれた中、一際目立つお祭りの空間は特別で、休日のビジネス街から似つかわしくないものの、興味がそそられる空間でした。

私は大学時代、「学園祭実行委員」でした。その為、OBとして創縁祭に参加するのは、後輩の活躍する姿を見たり、先輩や同級生と会う為でもあります。

そこで再会した先輩方や同級生と創縁祭内で開催されているホームカミングデーに顔を出しました。

懐かしい先生や職員の方々と、創縁祭のこと、今の二松學舎のことや私の今の生活など…時間が足りないくらいお話をさせて頂きました。(先生、学生課の皆様、ありがとうございます)

ぜひ二松學舎OB・OGの方は次回ホームカミングデーに参加して、懐かしい先生や仲間と会って青春の日々に戻ってはいかがでしょうか。

(お茶、お菓子だけでなく、二松オリジナルグッズや話題のねこ松にも会えますよ！)

教壇を去られる先生方

定年退職にあたって



高山節也

本年度(平成29年度)3月末日をもつて定年退職となる。自分が70歳

という年齢に達したとの実感はないが、物忘れがひどくなったとか、平衡感覚がなくなったとか、肉体的な老化は日ごとに顕在化しているのも確かで、そろそろ身を引くことやぶさかではない。定年後の人生設計についても、いささか積極的な志向もあることで、70歳という年齢は合理的な設定のようにも思える。ただこうした状況につきもののある種の儀式が、私はどうも苦手で煩わしいのである。実はこのような文章を書かされるのもそうだし、式場で花束なんてのも願い下げだが、儀式が定着すると変更困難というのが日本らしさのようでもある、まあ仕方ないかと諦めることにした。

一方、いわゆる教育者としての人格ということを見ると、昔はコンパで酔っ払ってとんでもない武勇伝を作ったり、私なぞ欠陥だらけで学生さんに偉そうな教訓を垂れる資格もなさそうで、ここでは専門分野にかかわることを思い出風にご披露し

て、責めを果たすこととしたい。

私が本学に赴任する以前は佐賀大学の教育学部国語科に所属していた。佐賀大学赴任後一年ほどしたあるとき、主任教授から武雄の鍋島家の寄贈文献中の漢籍の整理を依頼された。はじめは何が何だか分からずに、とにかく目録作りに明け暮れたのであるが、当然それを完成させるためには基本的な書誌学的知識が必要であることを痛感して、作業と同時に長沢規矩也氏の論文等を自習し、さらに地の利を生かして江戸時代の鍋島関係文庫全ての漢籍目録を作るという大それた目標を定めた。その関係で本学赴任後も、ゼミナールでは漢籍書誌学ゼミを名乗って、線装本のカード記入と解題作成を学生に課すという、地味な授業を20数年にわたって継続したのである。学生さんにとってはいささか酷な内容であったかと思うが、平均して5、6人のゼミ生をかかえ、今日までこられたのは、大学がこのゼミを容認し、学生さんがこのゼミを選択してくれたからにはかならない。ありがたいことであつたとつくづく思う。書誌学は学問の基礎の基礎であつて、そうした世界を垣間見たことが学生さんの未来に良き影響を与えたとすれば、望外の喜びである。

松苓会員ならびに本学関係者の皆様には、あらためてお礼を申し上げ

るとともに、ますますのご発展を祈ります。

昭和46年3月	國學院大學漢文学科卒業
昭和54年3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学
同年4月	佐賀大学教育学部国語科専任講師
昭和63年4月	二松學舎大学文学部助教
平成7年4月	二松學舎大学教授
平成30年3月	定年により退職の予定

二松學舎大学の思い出



谷口 貢

私が本学の専任講師として就任したのは平成2(1990)年4月であ

つた。しかし、その前の2年間は非常勤講師として沼南校舎(現柏キャンパス)で一般教養の民俗学を担当させてもらっていたので、そのときから数えると、実に30年もの歳月が過ぎたことになる。思い出は数多くあるが、その中のいくつかを紹介したい。

私が赴任した年に沼南校舎の2号館が竣工して、自宅の増え続ける蔵書に苦慮していた私にとって、個室

の研究室が自由に使えるようになったのは大変うれしかった。また大学の組織編成の都合で、平成7年から10年までの3年間は国際政治経済学部に移籍することとなったが、その間に国際政治経済学部の先生方と親しい交流をもつことができたのは、今から振り返るとなつかしい思い出となっている。

それから忘れることができないのは、平成16(2004)年3月に九段キヤンパス新校舎(1・2号館)が竣工したことである。それに伴って、九段の新校舎にも研究室をもてるようになるとともに、横浜市に自宅のある私にとって通勤時間の大幅な削減となったのは大助かりであった。また、その年の4月から文学部の新しいカリキュラムがスタートし、私が担当する国文学科の日本文化ゼミナールも始まった。今年度で第14期となるが、ゼミ出身の卒業生は292名になる予定である。

私が専門とする民俗学関連の授業を、「日本文化」という枠組みで担当することができたのは大変ありがたかった。そして、何よりも私の授業に参加してくれた学生達が「民俗学は面白い!」といってくれたことが、研究の大きな励みになったことである。創立140周年という節目の年、定年退職を迎えることができ、長い間お世話になった教職員の方々をはじめ、卒業生諸君に心から感謝申し上げたい。

- 1 出身大学 駒澤大学
- 2 二松學舎大学着任年度 平成2(1990)年4月
- 3 略歴

昭和23年新潟県糸魚川市生まれ。駒澤大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。二松學舎大学文学部専任講師、助教授を経て、文学部教授。この間、国文学科主任、附属図書館館長を務める。文化庁文化審議会専門員、千代田区文化財審議会委員、神奈川県文化財審議会委員を歴任。

退職にあたって



稲田篤信

6年間お世話になりました。大学の教員を始めたのは

富山大学で、

7年間在職しました。富山では他所から来て、やがて転勤して行く人のことを旅の人と呼びます。特別招聘教授というのは、職名からして旅の人です。それでも不思議なもので、富山でも本学でも得がたく楽しい日々を過ごしました。

ゼミナールのクラスは、馬琴の『八犬伝』の読解討論を中心とした八犬伝ゼミです。最初は3人、次年度から毎年20人近くの学生諸君と共に過ごしました。茗荷谷深光寺、鎌倉報

国寺、横浜中華街、浅草、谷中などあちこち廻りました。合宿は南房総の『八犬伝』の舞台の文学散歩でした。近年は岩井の民宿「川きん」に泊まって、伏姫富山籠りの籠穴に行くのが恒例でした。バスを利用して籠穴を見学した後、伏姫には与えられなかった帰路を宿まで40分ほど歩きます。夏の終わりの黄昏の中の短い旅です。

各学年必ず行ったのは元飯田町中坂の馬琴旧居跡です。中坂は地下鉄九段下駅近く、靖国通りの一筋向こう、硯友社跡、筑土神社のある通りで、昔は栄えていた所です。一時は江戸期の中坂の人や町並を考証復元してみたい気持ちに駆られました。『東京文学散歩』に一文を草しただけで終わりました。

世代の近い教員の方々との雅談俗談は、楽しい時間でした。若い世代の方々のお話を聞く機会が少かったのは残念でしたが、会議室やエレベーター前、9階の廊下、13階のレストランの記憶とともに皆様のお顔を思い出すと思います。また、事務の方々との挨拶や短い会話は、同じ職場で支えられて働いていることを実感するつかのまの楽しみであったと今になって思います。皆様、お世話になり、ありがとうございます。

広島大学卒業。東京都立大学大学院修了。神奈川県立外語短大付属高校教諭、鶴見高校教諭、富山大

学助教授、首都大学東京(東京都立大学)教授を経て、平成24(2012)年から、二松學舎大学文学部特別招聘教授。

退職に臨んで



野間文史

わずか4年間の在職でしたが、講義もゼミも、ともに楽しくやっ

てこられました。さて学生諸君はいかがだったでしょうか。なにしろ私にとっては孫の世代の学生諸君です。から、「みなさんご存知の通り」と言いながら、実はご存知ではなかったことの多かったことに愕然とすることも少なからず。それにも関わらず、授業の最後に書いてもらうアンケート(質問・感想等)のコメントに励まされての充実した4年間でした。ありがとうございます。

本紙は卒業生の方々がご覧になると思われまので、ゼミの学生諸君の卒業論文題目を以下に列挙します。二松學舎大学を思い出すよすがの一つにでもなれば幸いです。

○平成27年度

- ・『孫子』研究―謀功篇を中心に―
- ・荀子研究―性惡篇について―
- ・『孫子』研究
- ・墨子研究―公孟篇を中心に―

○平成28年度

- ・中国古代に於ける祖霊祭祀について
- ・淮南子研究―人間訓を中心にして―

・孝経研究

・中国の正史から見た日本

・公孫龍子研究

・孟子―内なる真心を説く―

・孫子研究

・燧人氏研究

・荀子研究―天論篇を中心に―

○平成29年度

・孫子研究

・荻生徂徠研究―その政治思想を中心に―

・漢書五行志研究―董仲舒を中心に―

・韓非子研究

・莊子研究―寓言を中心―

・古代中国の女性観―春秋左氏伝を

中心に―

・『史記』項羽本紀研究

・『蜘蛛の糸』『因果の小車』『カルマ』

次なる140年を目指しての二松學舎大学並びに松苓会の益々のご発展を西国よりお祈りします。

広島大学文学部哲学科中国哲学専攻卒業、同大学院修士課程修了、同大学院博士課程単位取得退学。国立新居浜工業高等学校校助教授、広島大学文学部教授を経て、平成26年に二松學舎大学文学部特別招聘教授に着任。

松苓会各支部活動報告

(出席・参加者欄は敬称略)

北海道支部

◆道南分会総会

事務局長 山崎郁紀



函館市・いか清大門にて

秋晴の10月14日(土)、函館市大門にある「いか清大門」で開かれまして。いつもの仲間と楽しい会食となりまして、今年肝臓を手術した田島分会長から、永らく幹事をしてくれた吉川肇氏に分会長を譲りたいとの申出がありました。二次会は例のカラオケ。観光シーズンとなりホテルが全くとれず苦労しました。

(参加者)

田島基義(文38) 開原正信(文39) 戸波 徹(文49) 荒井 到(文51) 吉川 肇(文59) 吉川真理絵(文60) 増井義昭(文39) 山崎郁紀(文36) ◆道東分会総会 事務局長山崎郁紀 昨年は台風の影響で帯広で開けず中止。今年は3年ぶりに寒い10月

28日(土)に釧路「ふく亭本店」で開催。

広い道東各地から集って盛会でした。二次会は「つぶ焼き専門店」でした。



釧路市・ふく亭本店にて

(参加者) 伊藤正彦(文34) 伊藤久美子(文34) 以上根室 川谷文雄(文39) 北見 澤向 崇(文39) 帯広 五十嵐猛(文56) 末廣勇人(文60) 以上釧路 増井義昭(文39) 山崎郁紀(文36) 以上札幌

◆平成30年支部新年会

支部長 増井義昭

雪も降らず穏やかな気持ちで迎えた新年も七草を過ぎたあたりから下り坂となり、旭川以北の各地が爆弾低気圧に見舞われた1月10日(水)、道内一の繁華街のススキノの「シーマーケット」で9名の同窓を集めて新年会が開催されました。

当日は、いつもご出席いただいたいる会員の他、「先輩に誘われて」と飛び入りでご参加いただいた会員もありました。また、荒天でJRが不通となり、急遽バスで駆けつけてくださった吉野泰正氏(文55)や、数年前まで事務局次長を務められた若松顕仁氏(文56)、道南分会長の吉川肇氏(文59)も、この日のために来れいただき、大いに盛り上がりました。



札幌市・シーマーケットにて

さて、会では長年事務局長を務めてくださった山崎郁紀氏(文36)の事務局長退任と今後の支部活動運営についての話題となりました。これまでの支部活動の経緯や会に対する思い、運営に対する意見などを参加者で共有するとともに、役員人事についても情報交換することができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。

これを受け、8月に開催予定の支部総会では通常の議題の他、役員人事についてもお諮りしたいと存じますので、総会へのご出席を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

むすびに、参加者には恒例の「おみやげ」として、本部よりいただいた「論語カレンダー」が配られ、大いに喜ばれました。

【出席者】

増井義昭(文39) 吉野泰正(文55) 工藤昌彦(文56) 若松顕仁(文56) 吉川 肇(文59) 永田哲之(文65) 富永貴之(文65) 齊藤裕子(文69) 佐々木伸(文74)

◆支部報発行

○第56号 平成29年12月15日発行

- ・支部新年会を開催しました
- ・支部総会を開催しました
- ・道南分会を開催しました
- ・道東分会を開催しました
- ・平成28年度決算
- ・平成29年度予算
- ・平成30年新年会のお知らせ
- ・会員の皆様へ重要なお知らせ

青森県支部

◆支部報発行

○第3号 平成30年1月1日発行

- ・新年の御挨拶 柴垣博孝
- ・平成30年度青森県支部の集い
- ・第2回青森県支部の集い開催
- ・二松學舎への道 高杉勝昭
- ・雑感 出逢い 阿部俊一
- ・二松學舎創立140周年
- ・青森県の演劇と二松學舎
- ・八戸県の漢詩文その二
- ・青森県出身学生の皆さんへ

岩手県支部

◆支部報発行

○第75号 平成29年7月31日発行

・『保軒牟岐喆雄遺篇』

・随想 縦の情報 牟岐喆雄

・『岩手日報』昭和61年3月25日付

・父の恩人 小野寺苓

・父のこと 小野寺苓
（『女の名前』小学館文庫）

○第76号 平成29年9月24日発行

・『保軒牟岐喆雄遺篇』つづき

千葉仁先輩の読み

○第77号 平成29年10月10日発行

・佐佐木鍾三郎先生のこと

○第78号 平成29年11月5日発行

・教育者としての牟岐喆雄先輩

茨城県支部

◆支部総会

支部長 沼田俊明

二松學舎松苓会茨城県支部総会・

懇親会は、平成29年11月18日（土）

ホテルレイクビュー水戸にて開催さ

れた。参加者は12名でした。

昨年は、茨城県教員の会総会と合

同で開催したが、教員以外も参加し

やすいように、時期を遅らせ単独の

開催とした。参加者は少ないものの

教員以外の参加者があり所期の目的

にかなった開催となった。

総会は、青山副支部長の開会のこ

とば、支部長挨拶に引き続き、来賓

の松苓会本部副会長新井喜義様にこ

挨拶いただいた。新井副会長からは、中断していた茨城県支部活動の再開に対する祝意と活動の継続への激励のことばをいただいた。



水戸市・ホテルレイクビュー水戸にて

経過報告
会計報告を審議した後、11月3日に水戸市の常陽芸文センターで行われた石川忠久先生の漢詩講演会について支部顧問の大地武雄先生から報告があった。二松學舎創立140周年の年にあたり、創立者三島中洲先生が新治裁判所判事として茨城の地に足跡を残していることを記念しての開催であった。当日は、石川先生を慕い多くの聴衆が集まり、先生の名講演に魅了された。講演会終了後、石川先生と関係者で大洗海岸にある中洲先生の詩碑を訪ねたとのことであった。また、中洲先生の詩碑についてはあまり知られておらず、永く草木に埋もれているような状況にあったので、大地先生が清掃整備にあたってきたとのことであった。そこで、永く中洲先生を顕彰するために、詩碑周辺の清掃を支部事業の一環に加えたかどうかとの提案があり、支部として検討することとした。

総会に続く懇親会ではテーブルを囲んで、参加者一人ひとりの近況報告や学生時代の懐旧談など歓談の一時となった。話題が中洲先生に及び、支部長からつくば市小田の小田城趾に中洲先生の撰になる碑文が残されていることを紹介した。前述したとおり中洲先生は、新治裁判所に在任中に小田城趾に訪れており、その縁で碑文を求められたもので、「小田城跡歴史ひろば」として整備された史跡の一角にその碑は建っており、大洗の詩碑と併せて訪ねてみてはと推薦があった。新井副会長からは、茨城県支部が中心となつて他県支部会員にも案内し、合同で探訪する機会を作つてはどうかとご提案いただいた。楽しく和やかな宴であったが、今後の支部活動へ示唆に富む提言があり実り多い懇親会となった。

群馬県支部

◆文学散歩

支部長 小石さち子

松苓会群馬県支部初めての文学散歩はあいにく小雨の中のスタート。

平成29年10月21日（土）10時に高崎駅東口に集合、松苓会本部廣田会長・小林幹事長、清水長野県副支部長をお迎えし、群馬県支部からは、8人の会員の参加があり、総勢11人、3台の車に分乗し散歩を楽しみました。

コース 土屋文明記念館では90歳のボランティアによる詳細な説明で

土屋文明の作家の足跡を順を追って丁寧に通る事ができました。2階レストランでランチし、世界遺産である富岡製糸場でもボランティアの方の



富岡製糸場にて

熱心な説明を聞くことができました。その後高崎市内の暢神荘で懇親会をし、初めてお会いする方々とも同窓のよしみか、直ぐに打ち解け和やかな意見交換や近況報告をすることができました。県人会レベルではなく近隣の支部の方の参加も頂き「文学散歩」できたことに、有意義なつどいになったと感謝申し上げます。

（参加者）

松苓会会長 廣田克己（文38）

同 幹事長 小林公雄（文38）

長野県副支部長 清水 登（文42）

新井喜義（文37） 金井 俊（文38）

高柳 薫（文47） 松本茂治（文62）

西牧秀敏（文62） 篠原真由美（文56）

池田ふみ子（文37） 小石さち子（文47）

◆支部総会

支部長 小石さち子

平成30年度二松學舎松苓会群馬県支部総会・新年会を平成30年1月20日（土）13時からホテルラシーネ新

前橋で開催しました。

来賓挨拶で松苓会本部の廣田克己会長から、今後の大学、松苓会の展望等についてお話を頂きました。

議事

- (1) 平成29年度事業報告
- (2) 平成29年度会計報告
- (3) 役員会の協議報告
- (4) 平成30年度事業案
- (5) 平成30年度予算案

講演会講師 高崎市議会議員 林

恒徳さん(文60)「近代文学と政治」文学部からの政治家は少ないが、

雨海博洋先生、中村宏

先生からの

「作者の思

いを読み深

める」とい

う教えが、

市民ニーズ

の把握や社

会のあり

方、政治と

は何かと問

い続けるベ



前橋市・ホテルラシーネ新前橋にて

た。

新年会 近況報告

参加者は次のとおり

松苓会本部会長 廣田克己 (文38)

新井喜義 (文37) 金井 俊 (文38)

塚本忠男 (文40) 都丸弥生 (文47)

高柳 薫 (文47) 小石さち子 (文47)

金澤正教 (文50) 佐藤 桂 (文50)

金田仁志 (文53) 勅使河原寛 (文53)
宮森庸子 (文56) 篠原真由美 (文56)
林 恒徳 (文60) 西牧秀敏 (文62)
大井田琴 (文85)

埼玉県支部

◆支部総会

支部長 青木一弥

平成30年の立春を迎えた2月4日、松苓会山崎正伸副会長の御臨席を賜り、平成29年度埼玉県支部総会・懇親会が昨年同様、大宮駅前のレストランにおいて開催されました。

当日は年明けから続く記録的な寒波もやや小康状態となり、例年どおり県内各地から多数の参加者が集う会となりました。

総会においては、町田支部長の挨拶に始まり、本年度の会計報告や次年度の役員案承認等、議事が滞りなく行われました。

ご来賓の山崎副会長からは、全国各支部の活動状況等が伝えられ、中でも、各地において文学散歩の取り組みが進行中であるとのお話を伺いました。

埼玉県支部において



さいたま市・東天紅大宮店にて

も、かつて埼玉文学館を訪ね、前田夕暮はじめ二松學舎にゆかりのある人々の足跡に触れる企画を行いました。埼玉県支部独自の文学散歩プランをいつの日か全国の松苓会々員の皆様にご提案できれば幸いと考えます。

総会に続いて行われた懇親会では、埼玉県支部会員の二松學舎大学常任理事五十嵐清氏より「Zozo Big」等、大学の現況についての説明があり、発展し続ける二松學舎大学の姿に思いを馳せるとともに、卒業生としての誇りを新たにする機会となりました。

本年度は残念ながら仕事の都合により国際政治経済学部出身者の参加は無かったものの、文学部38回生から84回生までの約50年間にわたる卒業生が会して懇親を深めることができました。今後ますます参加者を増やし、世代を超えた会員相互の親睦と二松學舎大学の発展を陰ながら支援できる組織としての埼玉県支部会運営に努めてまいります。

最後に、この1月から2月にかけての豪雪において被害に遭われた地域の皆様に対し、心よりお見舞い申し上げます。

(来賓)

松苓会本部副会長 山崎正伸(文41)

(参加者)

小林公雄 (文38) 木村誠次 (文39)

中居功一 (文39) 小林隆子 (文40)

持田賢一 (文40) 佐藤 修 (文41)

福嶋辰美 (文42) 町田哲夫 (文42)
町田芳子 (文42) 八木直也 (文42)
五十嵐清 (文44) 柴田京子 (文45)
中山幸男 (文46) 青木一弥 (文47)
吉野昇之助 (文47) 高砂光延 (文48)
小西明徳 (文60) 川畑 彩 (文71)
中山大輔 (文71) 江原瑞貴 (文74)
駒井伸彦 (文79) 平井ちひろ (文84)

東京都支部

◆第5回記念女子会企画行事

支部長 矢澤喜成

「新型特急リバーティーで行く初秋の日光」平成29年10月1日(日)

平成25年のスカイツリー見学に始まり、芝うかい亭会食と増上寺徳川霊廟参拝、目黒雅叙園食事会、東京湾クルーズに続き、5年目を迎えた女子会企画行事。

話題の新型特急リバーティーは、午前9時に浅草を出発。北千住乗車組と合流し

て、一路日光へ。到着後、バスで昼食会場ホテル「千姫物語」に移

動。

星野優子

副支部長兼

女子会代

表、平野光

治神奈川県



日光東照宮にて

支部長の挨拶に始まった宴会では、野口悦子常任幹事の司会による参加者各自の自己紹介もあり、初秋の庭園を眺めながら、季節の味を堪能した。

昼食後、徒歩で輪王寺・東照宮へ。大修復で燦然と蘇ったばかりの陽明門・眠猫・三猿等を見学。午後4時、和気藹々とした雰囲気の中、日光駅にて解散。今回もゴージャスな一日となった。

◆支部報発行

○第63号 平成30年1月1日発行

・恭頌新禧 矢澤喜成
・年頭所感 井上和男
・初秋の日光・東照宮参詣の旅 大山由美子

・五年の出会いに感謝 星野優子
・コラム三番町 齋藤祐一
・二松學舎創立一四〇周年記念式典に参加して 矢澤喜成

・千葉県支部総会報告 渡辺大雄
・三島中洲師墓参の旅 神河秀春
・訃報 顧問 佐佐木鍾三郎先生ご逝去

・二松の風景 第三回『変わるけど変わらない』 原由来恵
・東京支部事務局から 中原敬二
・編集後記 片山聖英

神奈川県支部

◆平成30年支部賀詞交歓会

支部長 平野光治
平成30年1月22日(日) 12時30分

より横浜崎陽軒本店にて、平成30年二松學舎松苓会神奈川県支部賀詞交歓会が開催されました。新井喜義松苓会本部副会長、矢澤喜成東京支部長をお迎えし、支部会員等15名を含め、17名の参加となりました。支部長挨拶後、新井副会長、矢澤支部長より、ご挨拶をいただきました。本部会長・支部顧問の廣田克己様による乾杯後、懇談並びに料理を味わう中で、ご参加いただいた皆様から近況報告をいただきました。父親としての思い、恩師や身近な人の叙勲への喜び、大学時代の思い出、健康に気を付けましようとの呼びかけ等、それぞれの心境が披露されました。3時間にわたる交歓後、記念撮影を行い、中川副支部長による閉会の言葉で会を終えました。健康に1年を過ごし、来年にまたお会いできることを楽しみに帰路につきました。二次会では卒業生でご活躍の人々に関する情報交換や文学歴史探訪候補地、支部事業についての意見交換等多岐にわたる話題で盛り上がりました。東京支部との合同総会開催や東京支



横浜崎陽軒本店にて

部、静岡県支部との共催行事等新たな一歩を踏み出した神奈川県支部ではありますが、会員相互の親睦の輪を広げることが大切にして、魅力ある事業の実施に向けて努力して参りたいとの思いを強くいたしました。参加者は次のとおりです。

〈来賓〉

松苓会本部副会長 新井喜義(文37)
東京支部長 矢澤喜成(文50)

〈会員〉

浅居美智子(文33) 廣田克己(文38)
小林孝彰(文38) 三嶽道子(文39)
平野光治(文40) 青野友美(文41)
山崎正伸(文41) 伊藤文雄(文45)
中川俊一郎(文43) 中川順子(特)
藤井隆晴(文47) 網野将美(文64)
佐藤 馨(政修5)
鈴木久子 吉田和恵(以上賛助会員)

◆支部報発行

○第37号 平成29年12月22日発行

・第40回支部定期総会報告
・支部事業について
・平成29年賀詞交歓会報告
・千葉県支部総会に出席して
・三島中洲師墓参・紅葉・温泉バスツアー実施について
・平成28年度決算、事業報告、平成29年度予算(案)、事業計画
・会費納入者名簿

長野県支部

◆「須坂・小布施を巡る」文学散歩
支部幹事 江村春彦

去る平成29年9月17日(日)、長野県支部恒例の文学散歩が行われました。当日は生憎の悪天候になりましたが、松苓会本部の小林公雄幹事長も参加され、支部会員を含めた4名での実施になりました。見学地は、以下の通りです。来年以降も、県外からの参加を歓迎いたします。実施日や内容につきましては、長野県支部にお問い合わせください。

〈田中本家博物館〉

江戸中期(1733)に、初代田中新八が、穀物、菜種油、煙草、綿、酒造業などの商売を始め、代々須坂藩の御用達を勤めるとともに、名字帯刀を許される大地主へと成長しました。3代と5代は幕末に士分として藩の財政に関わる重責も果たし、その財力は須坂藩をも上回る北信濃屈指の豪商となりました。敷地3千坪の中には、当時の面影を伝える約100メートル四方を20の土蔵が取り囲む豪壮な屋敷構えや内部の回遊式庭園、軒をつらねる客殿や主家などの建物には驚かされました。また、土蔵に残されていた江戸中期から昭和ま



須坂市・田中本家博物館にて

での田中本家代々の生活に使用された品々が展示されており、その質と量の豊富さから近世の正倉院ともいわれる「衣裳、漆器、陶磁器、玩具、文書」などは、豪商の生活を想像させてくれるものでした。

〔北斎館〕

葛飾北斎(1760～1849)は、80代半ば頃小布施に逗留し、地元の高井・高井鴻山(1806～1883)の庇護のもとに、岩松院の天井画「八方睨み鳳凰図」や東町・上町の祭屋台の天井絵を描きました。当時の小布施は繁栄を誇り、北斎をはじめ文人たちを惹き付ける魅力ある町でした。北斎館は、天井絵のある二基の祭屋台(長野県宝)と、「雲竜図」「雪の信濃路」などの肉筆画を中心に、版本や錦絵などが展示されていました。当日は、秋の特別展として「北斎漫画の世界展」が開催されました。もともと絵を学ぶ人のために作られた絵手本と呼ぶ教科書であった『北斎漫画』には、踊りを踊る人や楽器を演奏する人、食事をする人や昼寝をする人、また、人物以外にも植物や魚、動物、さらには建築物などの細かい描写までありとあらゆるものも描かれていました。表現の中には風刺的な要素や、戯画風のものもみられ、現代のマンガの走りのようなものも見ることができ、非常に興味深く楽しむとともに、北斎の非凡さを感じさせるものでした。

〔旧小田切家住宅〕

小田切家は街道と街道が交差する町の中心地に居を構え、麹、酒造、油、蚕糸、呉服商などを営む豪商として、幕末まで町年寄りや須坂藩の御用達を勤めていました。明治3年(1870)の須坂騒動の際に多くの建物が打ちこわしにあつたと伝えられ、現存する建物のほとんどは明治時代に小田切辰之助(1839～1904)が再建したものです。小田切辰之助は須坂の製糸業の発展に大きく貢献し、銀行の設立や水道の敷設など町の発展にも寄与しました。私は、一昨年のオープンを知らず今回初めて見学しましたが、製糸業など時代の先駆けとなった場所が身近にあったことを知り、誇らしくも感じました。

〔参加者〕

関 保典(文35) 小林公雄(文38 埼玉)
清水 登(文42) 江村春彦(文57)

静岡県支部

◆支部総会

支部長 永井陵次
平成29年10月28日(土)
静岡県職員会館「もくせい会館」

〔来賓〕

二松學舎大学副学長 高野和基
松苓会副会長 山崎正伸(文41)
神奈川県支部長 平野光治(文40)
〔支部会員〕
神津賢一郎(文27) 吉野恵津子(文37)
佐々木裕美(文45) 外山博世(文51)
江本浩二(文51) 飯田郁子(文71)

永井陵次(文38)

以上の概要によって静岡県支部総会が開催されました。東西に長く延びた静岡県では、西部・中部・東部と年次毎に開催地のローテーションをすることとなっており、29年度は西部地区での開催の年に当たっており、又、前年度支部総会の折、神奈川県支部の活動に刺激を受けて、本県でも文学散歩のきっかけを付けようとの意向もありながら、新年度を迎えてみると、支部長には地域活動・NPOなど、多数の役割が降り掛ってきて、とても遠隔地に交渉、打ち合せに向くゆとりがありませんでした。やむなく近場の会場で、ともかくも総会だけでも催すこととなりました。支部会員の皆様、とりわけ西部地区にお住まいの方々には申し訳なく思っております。にも拘らず、総勢10名もの皆様に御出席を頂き、ありがとうございます。御来賓の3名の先生方には遠路お運び下さり、改めてお礼申し上げます。

28年度から29年度にかけては、松苓会85周年、本学創立140周年と、歴史



静岡市・もくせい会館にて

上減多に無い程、盛り沢山の行事がありました。それらの報告を交えながらの学生時代の思出話などに花が咲く歓談でしたが、気掛りの一つは、何といっても50数名を数えるに至った国際政治経済学部卒生生の集い組織する方策についてです。この件については後日、中洲先生墓参ツア一の折、神奈川県平野支部長より、「悩みはどこの同じ、一緒に対処して行こう。」との力強い言葉を頂き、ありがたく思う次第でした。以前、廣田会長からは「ともかく動き続けてゆくことだ。」と示唆を受けたが、これも意味深く、一寸背負い切れないような重さを感じました。ともかく又来年に向けて動き始めることとしましょう。

◆支部報発行

○第19号 平成29年9月1日発行

- ・二松學舎創立140周年 記念式典 漱石アンドロイド完成
- ・平成28年度支部総会・懇親会
- ・返信ハガキの近況報告より
- ・コラム「もみぢ踏みわけ②」
- ・平成27年度会計報告

永井陵次

三重県支部

◆支部総会

支部長 小川直紀
去る12月9日(土)午後5時半より
会員の山口さんの「津ミートかし

わぎ」にて松苓会三重県支部「朋友会」総会を開催致しました。

大学より五十嵐清常任理事(文44)に臨席賜り、大学の近況および140周年記念事業の報告等に参加者各位の大学時代の思い出と重なり、総会後の親睦会に花が咲きました。



津市・津ミートかしわぎにて

今回の総会では、稲垣支部長より人事の話、三重支部会則の改定、会計報告、そして昨年度より三重支部として団体加入した斎藤拙堂顕彰会が主催する第1回小中学生書道展への協力依頼および後援の「生誕220年記念斎藤拙堂展」の案内が報告されました。

斎藤拙堂については、杉野茂(専14)顧問が長年にわたり研究会を主宰、顕彰会へと発展させるも本年1月に死去。著作物も多く、最後の著作『三重県名勝詩』の出版記念祝賀会が平成27年の総会時に行われ、また創立135周年には大学より「名誉学位」を授与される等、学究生活における成果と平成6年に会則を作り支部長として尽力する。その後稲垣武嗣氏(文33)が支部長となるが、杉

野氏は顧問として参画されました。

顕彰会は理事として稲垣氏が引き継ぎ今回協力依頼の書道展を企画運営されています。ただ郷土の文化の掘り起こしと継承については、第一人者である杉野氏に続く後継者が不在にて、寂しさを禁じ得ません。

引き続き懇親会となり、大学在学中、遠く沼南校舎に2年間通学した話、超一流の教授陣による授業の話、ゼミでの話題等、思いつく限り宴となりました。現在の大学周辺の様子を伺えば靖国神社周辺に4号館までの校舎、次年度以降に、母校への見学を企画実施の連絡を楽しみにして散会しました。

明日は、三重県支部会場を提供されてきた山口良民氏の七回忌の法事とお聞きして、長年にわたる親睦会へのご支援に感謝しております。

出席者は左の通りです。

写真前列右より

小川直紀(文44) 伊藤淑子(文38)

稲垣武嗣(文33) 納所佳子(文54)

後列右より

山口由香(文38) 五十嵐清(文44)

三林忠明(文34) 加藤武俊(文49)

岡部美由紀(文57) 竹嶋秀聡(文56)

宮崎県支部

◆支部総会

支部長 宮崎宣幸

平成29年度宮崎県支部総会は、今年に残念ながら本部からの参加が無い中で、平成30年1月20日(土) 6

時から宮崎市内の「レガメ」で実施しました。当初11月を予定していましたが、会員の都合で延期し、1月になりました。7名の予定が、1名急病の為欠席し、次の6名の参加でした。

内村厚夫(文44) 斎田清秀(文44) 後藤裕子(文51) 落合正樹(文62) 藤崎正二(文63) 宮崎宣幸(文41)

大久保昌彦さん(文38)、金川けい子さん(文31)は諸事情で欠席。中蘭(旧姓桑山) 祐子さん(文61)は急性胃腸炎でやむを得ず欠席。望月高明さん(文51)(祐子奥様文51)は3月末で国立都城工業専門学校を定年退職され、故郷に帰る予定であり、その準備で欠席。他は連絡無し。

最初に本部総会の内容報告をし、次に附属高校の甲子園出場の寄付の報告、さらに本件を含めて九州管内からの二松學舎への進学状況減少の件の報告、最後に役員改選の件を協議した。その中で3年続けて二松學舎へ進学させている後藤先生から詳しい説明があり「以前は教員になる目的で二松學舎を選んでしたが、最

三島中洲師墓参・紅葉・温泉バスツアー

神奈川県支部長

平野光治

平成29年11月26日(日) 松苓会後援、東京都支部・静岡県支部・神奈川県支部共催による「三島中洲師墓参・紅葉・温泉バスツアー」が開催されました。大型バス使用により、

近では兎に角東京の大学に進学したいという生徒も増えて来て、比較的入学しやすい国際政治経済学部に推薦するのも一つの方法だ」と話されていました。地方から二松學舎に進学させるための一つの方法として今後検討していきたいと思います。

引き続き懇親会に入り、各自近況報告をする中で、いろいろな場面で松苓会の先輩後輩と繋がりが出てきて大いに盛り上がりました。

藤崎氏は「詩のボクシング」の県内王者であり、斎田氏は県内だけでなく国内外のレースに出るマラソン走者、後藤氏は書道の県無鑑査、落合氏は進学指導のベテラン、内村氏は県立中学校長を経て現在是不登校生徒のベテラン相談員として活躍中であることなど、それぞれの分野で大いに活躍していて頼もしく感じました。

会終了後も二次会まで参加して話題が尽きず、大いに親睦を図れたと思います。帰り際、また次年度の再会を期して解散しました。

ゆったりとしたバスツアーとなりました。

富士霊園では眼前に広がる青空と富士山の絶景に迎えられ、参加者全員が驚嘆の声を上げることとなりました。中洲師墓参では隣の墓参の皆様とお話ができました。中洲先生を知っていたいただき、「今後よろしく

お願いしま
す」とご挨拶を交わす
ことができ
ました。思
いもかけぬ
交流と一人
ひとり心を
込めた墓参
ができました。
墓参後
参加者から
「念願の墓
参がかなっ
た」とのお声掛けをいただきました。

また、他支部の皆様とともに、神奈川県支部再興の功労者であり作家の鈴木了三様（専13）が眠る「日本文藝家協会・文藝者之墓」にお参りしました。参加者の皆様の支部をこえた松茶会への深い思いを感じることもできました。

紅葉、五百羅漢の鑑賞目的地である長安寺は時間の関係からカットとなりました。ホテル岡田での昼食、懇談、温泉入浴と贅沢な時間を持つことができました。美味しい食事と温泉、そして懇親等ご好評をいただきました。「温泉が良かった」との声に安堵いたしました。また、先輩の高木正人様（専14）のご参加に感謝申し上げます。当時の学生生活のお話は興味深く、貴重な体験となりました。



富士霊園 中洲師墓前にて

時間の関係もあり皆様からの一言や見学地を省かざるをえず、実施上の問題がありました。写真送付やまとめの小冊子をお送りして、お礼とさせていただきます。

三支部による共催事業という初めての試みでしたが廣田克己松茶会長、矢澤喜成東京支部長、永井陵次静岡支部長、ご参加いただきました各支部会員の皆様のご協力により開催することができました。懇親会への参加を含め、感謝申し上げます。今後他支部との交流を深め、会員相互の親睦の輪を広げていこうと考えております。

■松茶会本部

廣田克己（文38） 新井喜義（文37）
山崎正伸（文41） 小林公雄（文38）
持田賢一（文40）

■東京都支部

矢澤喜成（文50） 大山由美子（文47）
中原敬二（文62） 神河秀春（文47）
野口悦子（文51） 高木正人（専14）
佐藤 修（文41）

■静岡県支部

神津賢一郎（文27） 永井陵次（文38）
吉野恵美子（文37） 佐々木裕美（文45）
■神奈川支部

平野光治（文40） 中川俊一郎（文43）
小林孝彰（文38） 浅居美智子（文33）
網野将美（文64） 鈴木久子（賛助会員）

恩師からの便り

中洲晩年の漢詩



石川忠久

私は今、学祖三島中洲の生涯に残した漢詩全作（凡そ二千七百五十

首）を解説し終えたところで、近く公刊の予定であるが、ここでその最晩年の作を紹介して、先触れとしよう。

中洲は周知のとおり大正8（1919）年5月、数え90歳で生涯を終えた。その年の春、今の太田区上池台に土地を買い、墓地とし、詩二首を作っている。その一首を紹介しよう。

小池里買青山二首 其一

小池里に青山を買ふ二首、
其一

負郭青山一帯横

負郭の青山 一帯横たはる

松高土厚小池清

松高土厚くして小池清し

命児北面建碑碣

児に命じ北面して碑碣を建てん

生死不更傾日誠

生死にも更めず 傾日の誠

（訳）

小池の里（現太田区上池台）に墓地を買った、二首の其の一
この辺り一帯は、都の郊外で墓地

が続いている。
松が高く聳え、土地が厚く堆積し、清らかな池がある。

子に言いつけて、ここに北向きに墓石を建てさせよう。

生きている時も死んでからも、太陽に向かつて傾く向日葵のごとく、陛下（大正天皇）への真心が変わらないように。

中洲は、明治29年3月、当時皇太子の大正天皇の侍講となり、天皇御即位後は宮内省御用係と名称は変わったが、歩行不自由となった大正4年（86歳）まで、引き続きお仕えしている。

中洲のご指導の宜しきを得たためか、大正天皇は、皇太子時代の御年18歳（明治29年）より、御病氣になられる39歳（大正6年）までの22年間に、実に千三百六十七首の漢詩を遺された。歴代天皇の第一と申し上げることができよう。

明治天皇、昭和天皇の和歌はよく知られているが、大正天皇には和歌の他に、漢詩の大きな遺産が残されていること、そしてその蔭に、御指導の榮に与った中洲の存在があったことを、改めて力説したいと思うのである。（名誉教授）

（編集部注 上池台の墓地は、平成11年11月3日に富士霊園に移されました。）

大学だより

創立140周年記念式典を挙げる

二松學舎創立140周年記念式典が、平成29年10月10日、中洲記念講堂で挙行された。式典では、水戸英則理事長から新長期ビジョン「2030 Plan」の発表があり、学術文化などの分野で活躍する卒業生に、学術文化功労賞、同奨励賞、特別功労賞、同奨励賞が授与された。式後、記念講演会が行われ、トークイベントには夏目漱石特別教授（アンドロイド）も参加した。

〈学術文化功労賞〉
大藏吉次郎（文40）
大藏流狂言方能楽師。重要無形文化財能楽保持者。本学特別任用教授。

安岡定子（文53）

論語塾講師。「銀座寺子屋こども論語塾」など、全国各地で論語による社会教育活動を展開。

村田沙耶香（附属沼南高等学校卒）
作家。第26回三島由紀夫賞（平成25年）、第155回芥川龍之介賞（平成28年）受賞。

〈学術文化奨励賞〉
竹吉優輔（文72）

作家。第59回江戸川乱歩賞受賞。マシコタツロウ（増子達郎）（政6）作詞・作曲・編曲家。歌手。「ハナミズキ」ほか多数のアーティストに楽曲を提供。

狩俣公介（附属沼南高等学校卒）
日本画家。東京藝術大学大学院講師、女子美術大学講師
〈特別功労賞〉
鈴木誠也（附属高等学校卒）
プロ野球選手（広島東洋カープ）。

WBC（ワールドベースボールクラシック）日本代表（平成28年）。〈特別奨励賞〉

飯塚智広（附属沼南高等学校卒）
NTT東日本野球部監督。シドニオリンピック日本代表。

松苓会寄付講座を実施しました キャリアアセンター

二松學舎大学の同窓会である松苓会では、昨年に引き続き、「在校生教育支援助成事業」のひとつとして、キャリア・デザイン講座を実施しました。

3年次生を対象とした「魅力発見！自己分析講座」（10月21日、11月11日、1月12日の計3回）。テーマは3つ（①自己理解を深める②就職活動で役立つコミュニケーションスキルを学ぶ③参加者同士の人間関係を深める）。講座はグループワークやディスカッションを中心に進行し、最後は共に学んだ仲間とのエール交換で終了しました。

本年度は新規企画として、1・2年次生対象の「楽しく取り組むコミュニケーションワークショップ」（1月31日）も実施しました。テーマは3つ（①学生生活に活かすコミュニケーションを学ぶ②今後の学生生活について考える③学科や学年を超えた繋がりを持つ）。講座はペアインタビューや課題解決型のグループワークを中心に実施しました。

講座は1日で完結する形式とし、

朝9時から夕方5時までと長時間にわたるもので、参加者は延べ31名と決して多くはありませんでしたが、アンケート結果では、「グループワークが楽しかった」「他学科の方と知り合うことができた」「就活だけでなく今後の人生にも役立つような講義だった」等、満足したという回答が多数を占めました。



楽しく取り組む！
コミュニケーションワークショップ

教員免許状更新講習のお知らせ
平成30年度の教員免許状更新講習が次の日程で開催されます。
期日 平成30年8月6日（月）
10日（金）
会場 二松學舎大学九段1号館
受入人数 100人
詳細は、教職支援センターにお早めにお問い合わせ下さい。
電話 03-3261-1375

久保田美年子名誉教授、 瑞宝中綬章を受章



平成29年秋の叙勲で久保田美年子名誉教授が瑞宝中綬章を受章しました。

久保田名誉教授は、中国ハルビン出身。

大連弥生高等女学校、大連日僑高等学校を卒業され、西北大学理学院に入学されるも、帰国のため退学されて、改めて東京教育大学文学部に入学され、同大学文学部漢文学科を卒業された。桜美林大学中国語中国文学科専任講師を経て、昭和47年4月に本学文学部に専任講師として勤務。昭和50年10月助教授、昭和57年4月教授。平成16年3月定年により32年間にわたる二松學舎大学での教職生活を終え、同年4月名誉教授の称号が授与されました。大学では主に中国語学教育を担当されました。授業の他にも中国語学習会(CIS)の顧問として、中国劇の指導など幅広く中国語教育に関わられました。

田中亮太君、 改組日展で入選

文学部4年生の田中亮太君は、改組日展5科「書」の部で入選しました。作品は、「うつりゆく」という題名のかの書。万葉集から選んだ和歌12首、「折帖」仕立て。

同君から寄せられた喜びのたよりを掲載します。

「この度、改組 新 第4回日展に新入選させていただき、日頃からご指導いただいている福島一浩先生をはじめ、私を支えてくださる全ての方々に感謝の気持ちで一杯です。

作品は素朴でおおらかな万葉の歌に想いを馳せて丁寧に取り組みました。会期中多くの方々に御高覧頂けたことが何よりも嬉しく、この場をお借りして御礼申し上げます。

故郷広島より上京し、大好きな書と向き合うことができた大学での4年間は、私にとって幸甚な時間でした。これからも書の道一筋に歩んでいこうと思います。」



卒業生名刺交換会を開催

平成30年2月24日(土)、九段下駅近くのホテルグランドパレスで、大学、松苓会の共催行事として開催しました。名刺交換会は、ビジネス界で活躍する本学卒業生に異業種間交流の場を提供し、情報交換や在学生の就職支援にも結びつけたいとの思いから開催しているものです。

3回目を迎えた本年度は文学部卒業生47名、国際政治経済学部卒業生20名の合計67名が参加しました。大



学教職員、松苓会役員、それに今回は大学父母会役員も参加し、総勢130名を超える賑やかな会となりました。

平成30年度二松學舎大学、 大学説明会と地区別父母懇談会

平成30年度の地方における大学説明会と地区別父母懇談会が次のとおり予定されています。

大学説明会にはどなたでも参加できます。母校の最新情報を知るよい機会となりますので、奮ってご参加ください。

大学説明会、父母懇談会には大学関係者が出席されます。これを機会として、大学関係者や支部会員相互の交流の場を計画してみませんか。

〈大学説明会〉

○長野県松本市

期日 平成30年6月23日(土)

会場 PYRENE(ピレネ)

○岩手県盛岡市

期日 平成30年7月7日(土)

会場 ホテルメトロポリタン盛岡

〈地区別父母懇談会〉

愛知県名古屋市中区 6月10日(日)

山口県山口市 6月10日(日)

群馬県高崎市 6月16日(土)

長野県松本市 6月24日(日)

岩手県盛岡市 7月8日(日)

高知県高知市 8月4日(土)

福岡県福岡市 8月4日(土)

松苓会の歩み(9)

今回は松苓会に寄せられた資料を紹介する。

万葉旅行のアルバム

最初に、昭和34年当時、二松學舎大学に兼任講師（専任校は東京教育大学）として出講していた中田祝夫先生のご遺族（千野明日香さん）から万葉旅行のアルバムが寄贈された。旅行に参加された学生が作成し、中田先生に贈られたものと思われる。二松學舎大学新聞（第84号）に掲載された中田先生の「記紀万葉旅行の思い出」の切り抜きも送られてきた。昭和34年5月7日から5日間の旅行で、第1日は伊勢神宮に詣で、2日目から明日香巡りである。当時の参加学生は、28回卒、29回卒に当たる。



万葉旅行のアルバムより

角帽と帽章

次に、二松學舎大学名誉教授の横

須賀司久先生

（文35）からは、各種の資料が送られてくる。横須賀

名誉教授は在職中、「中洲

詩文」（平成8年のカリキュラム改革までは全学生必修科目）の後継科目である「日本漢詩文」の講義を担当しており、講義原稿や関連する資料、また自身が教わった濱隆一郎先生、橋川時雄先生に関するものなど。

今回は、角帽を紹介する。写真の角帽は先生が学生時代日大の先輩から譲りうけたものだという（自分のは学友に貸し戻ってこなかった）。「角帽みがきは卵の黄身」と注釈。

筆者の在学中（文38 昭和41年4月～45年3月）は学帽を被っている学生は、ほとんどいなかったが、横須賀名誉教授の頃も、少数派ではなかっただろうか。「二松學」の帽章は貴重である。

筆者の在学中（文38 昭和41年4月～45年3月）は学帽を被っている学生は、ほとんどいなかったが、横須賀名誉教授の頃も、少数派ではなかっただろうか。「二松學」の帽章は貴重である。



角帽



学帽・学生服姿の横須賀名誉教授

「二松學」の徽章と学生用バッチ

38回卒の小林孝彰氏からは、旧5階建て校舎（建築中のものを含め）の写真や、学生服用「二松學」襟章と学生用のバッチが寄贈された。この徽章は大学入学時に購入したものである。とされる。「二松學」を刻した学生服のボタンが筆者のところにあつたので、併せて紹介する。



小林孝彰氏からは、入学試験合格通知も寄せられた。学費の記載がある（授業料6万円、松苓会入会金は500円）。



入学試験合格通知

校舎を刻したバックル

最後に、専門学校13回卒の鈴木了三氏の夫人鈴木久子さんから託されたバックルについて記す。

バックルには専門学校校舎、校章

と2594の数字が刻されている。どういった経緯で作製されたものかはわからない。当時の専門学校が製作に関わっていたのだろうか。



専門学校を刻したバックル

数字の2594が仮に皇紀を示すとするれば昭和9年に当たる。専門学校7回生が入学したのが昭和9年4月である。6年後の昭和15年がいよいよわゆる紀元2600年である。11月10日の宮城外苑で行われた紀元2600年式典については、当時専門学校生として参加した田中伸教授（専13）が『二松學舎百年史』に学生の代表4名の一人として参加した経緯を記している。

（文責 小林公雄）

資料提供のお願い

松苓会では、継続して資料を収集しています。機関誌『松苓』創刊号および第5号～8号などの刊行物や、写真・アルバム、また専門学校当時の資料、昭和20年～30年代の資料等のご寄贈をお願いいたします。

沼南校舎開設時の四方山話

高柳幸雄（文49）

昭和57年4月、千代田（現九段）校舎にて浦野匡彦理事長から異動の辞令を拝し、沼南（現柏）校舎へ向かいました。奉職して2年目の春のことです。今から36年も前になります。当時の沼南校舎の住所は柏市ではなく、東葛飾郡沼南町でした。二松學舎大学は、この年の入学生から一般教育課程を沼南校舎で行うことにしました。

沼南校舎開設時の事務組織は、業務部業務課、教学部教学課、附属図書館分館閲覧課の3部署で構成され、常任理事の柴田周藏学監のもと、業務部は田谷昌助部長、渡部光英課員、東郷政美課員、斎藤光枝課員、泉洋課員の5名、教学部は荻原賢晴講師・部長、酒井淳吉助教授・教学課長、百瀬寛海教学課長補佐、源川進講師、大地武雄講師、岡村幸男課員、平崎幸雄課員、新井幸子課員、清原千鶴課員、勝倉勝巳課



国語教育研究会との野球
於 沼南校舎グラウンド

員、勝倉利子課員、そして私の12名、附属図書館分館は、橋本栄治教授・分館長、大上恒雄閲覧課長、横谷孝子課員、小町邦明課員の4名計21名が配置されました。

新入生は九段会館での入学式に参列した翌日、ガイダンスに出席するため、初めて沼南校舎に来校しました。柏駅からスクールバスが国道16号線、県道と走り、狭い町道に入ったあたりで、「あとどれくらい乗るのですか。沼南校舎に通うなんて知らなかったです。」と、私に話しかけてきた学生がいました。少し不安になったようでした。到着後、5階の大教室でガイダンスが始まり、柴田周藏学監から「本学は諸君を大人として扱う。諸君の多くは成年に達していないであろう。それなのに大人として扱うのは、諸君が自らの意志と判断によってこれからの4年間の学問研究に専念する心構えを持つて大学に入ったと確信するからにはかならない。」と大学生としての自立を促されました。また、最後に「課外活動は正課教育とともに4年間の学習、生活の中で重要な役割を持っている。学生が自らの責任と判断により自由闊達な活動を行うことを期待する。」と話されました。

業が展開されまし
た。課外活動において、学生が築いてきた伝統あるクラブ・同好会等が、活動日などを工夫し、柔軟に対応してくれて、夕方になると千代田校舎から上級生が後輩のために渡ってきて、指導をしている光景をよく目にしました。また、沼南校舎の学生のため、教学課付の源川進先生が「談書会」を、大地武雄先生が「漢詩研究会」を立ち上げ、展覧会や合宿などを行い、積極的に活動していました。



開設時のスクールバス
於 校舎前駐車場

さて、私の所属する教学課は、酒井課長・百瀬課長補佐のもと、課員は学生の顔と名前を覚え、遺漏なく業務を遂行しました。学生の多くが教学課の窓口に来てくれて、よく談笑しました。荻原部長や酒井課長は、若輩の行く窓口業務をいつも暖かく見守ってくれていました。沼南校舎ならではのことですが、近隣から学生が駐車した車の件で通報があり現場へ急行することもしばしばありました。百瀬課長補佐と岡村さんとが該当学生を説諭する様子を見て、学生指導を学んだりのものです。

体がまとまっていきました。昼には、柴田学監を囲んでよく食事をとり、先生のユーモア溢れる知的な話に、興味をそそられ、楽しいひと時を過ごしました。沼南の職員で、年に1〜2回旅行もしました。初年は勝浦へ、翌年は小町さん（現事務局長）が運転するマイクロスバスで湯河原・箱根へ訪れました。また、職員の野球チーム（グリーンソックス）では、校舎開設祝いに九段対沼南の試合を沼南の地で行いました。沼南は人数が足りず、バスのドライバー、食堂と売店のチーフを助っ人に戦いました。学生のサークル等とも野球の試合をよく行い、交流を深めました。

沼南校舎開設の春は、附属高等学校野球部が春の選抜で準優勝した年でもあり、二松學舎に追い風が吹いていました。

法人、教職員並びに学生が一丸となり、沼南校舎は無事に開設し、学生達の賑やかな声が溢れる活気ある校舎となりました。その後の二松學舎の発展は志願者が増え続けたことから明らかです。沼南校舎立ち上げ時に一員として働くことができたことは、その後の仕事の糧となっています。



湯河原・箱根の旅 於 敷島館

（附属図書館事務部長）

卒業生だより

戸田 浩氏、

文部科学大臣教育者表彰受賞

戸田浩氏（文47回 昭和54年3月



卒）が昨年12月5日、教育功労者として文部科学大臣表彰を受賞しました。

戸田氏は、本学卒業後の昭和54年4月、高知県立室戸岬高等学校国語科教諭を振り出しに、高知県立高等学校6校に勤務。今回の受賞は、高等学校教諭としての永年にわたる教育活動、平成3年4月からの県教育委員会高校教育課指導主事、同管理主事、同教職員課管理主事、県教育センターでの研修指導班長・教科教育班長、更に平成19年4月からの県教育センター学校支援部長、県教育委員会教育政策企画監としての功績や、県立高等学校長（平成22年4月から佐川高等学校、平成24年4月から高知丸の内高等学校、平成27年4月から岡豊高等学校）歴任の功績が認められたものである。団体役員としても、全国高等学校長協会常務理事、全国普通科高等学校長会理事、高知県高等学校長協会会長など、多くの要職に就かれている。

戸田氏は、平成29年1月から松苓会高知県支部長を務められている。

古谷田奈月さん、『リリース』で織田作之助賞受賞

平成25年『今年の贈り物』（『星の民のクリスマス』と改題、新潮社）で第25回日本ファンタジーノベル大賞を受賞した古谷田奈月さん（文72回 平成16年3月文学部卒）が、平成28年10月に刊行した『リリース』（光文社）で第34回織田作之助賞を受賞しました。大阪市、大阪文学振興会、毎日新聞社等が主催の同賞は、平成28年10月から平成29年9月に刊行された新鋭・気鋭の作家の単行本が対象。

「古谷田作品の舞台は、男女の性差の自由が確立した近未来。現代人が直面する課題を織り交ぜた刺激的な作風」（『毎日新聞』平成29年12月20日付）と紹介された。授賞式は3月5日に大阪で行われた。

同作品は、平成29年5月の三島由紀夫賞の候補作にも入っていた。



同氏には、他に『ジュンのための6つの小曲』『望むのは』（ともに新潮社）等の著書があります。

ワングル部の同窓会

佐藤 修（文41）

昨年の10月29日、秋田県にかほ市象潟のたつみ寛洋ホテル（佐藤寛氏経営）で行われた3回目のワングルフォーゲル部同窓会に初めて参加しました。

東北新幹線の古川駅で菅原さんの車に同乗し、鳴子・尿前の関・最上川など紅葉の「奥の細道湯けむりライン」を通り、夕方象潟に着きました。秋田をはじめ岩手・宮城・長野・群馬・東京から8人が集まり、温泉に入った後宴会が始まりました。

ワングル部は、昭和44年当時1年の高橋良光君によって創部されました。丹沢山行や八ヶ岳縦走・白馬三山縦走などを行いました。当時の山行が走馬灯のように思い出されました。卒業後初めてお会いする方もあり、50年前の記憶が脳裏の底から湧き出てきました。特に、八ヶ岳山行は二泊の本格的登山であり、なかなか見られないブロッケン妖怪を見ることのできたり、初雪が降って白銀の世界を堪能したりの記憶が甦つ



にかほ市・たつみ寛洋ホテルにて

てきました。

また、当時は、70年安保の前年で学生運動の盛んな時代であり、口角泡を飛ばして激論したことなどが昨日のように思い出されました。部屋に戻っても話題は尽きず、朝の4時過ぎまで語り明かしました。

次の日は、それぞれ帰途につきました。日本海の荒海を眺め、象潟の街も車から見ました。松尾芭蕉が訪れた時に、「象潟や雨に西施がねぶの花」と詠まれた、松島のような景勝地がその後の地震で土地が隆起し、現在は、陸地の中に小山が点々と見え、当時に想いを馳せらせながら、鳥海山の見える象潟の街を後にしました。

参加者は次の8人でした。

佐藤 寛（文38） 小林澄彦（文39）
佐藤 仁（文39） 竹之内光男（文39）
高橋良光（文41） 菅原栄子（文41）
片倉俊秀（文41） 佐藤 修（文41）

あらためて実感したこと
— 狂言研究会同窓会

原由来恵（文63）

平成29年9月17日（日）。この日は関東に台風接近というニュースが流れる荒れた天候。「本当に集まれるのかな？」幹事担当だった私たちが63回生はドキドキしながら、同窓会当日の準備を始めました。

しかし、悪天候にも関わらず、多くの仲間たちが会場の二松學舎大学1号館13階レストランに時間通り：

というより狂言研究会らしく早めに集合。長年にわたりご指導くださり、卒業生でもある大藏吉次郎先生（文40）と奥様（文40）、松苓会から廣田会長、山崎副会長にご臨席を賜り、学校法人二松學舎創立140周年で大藏先生が学術文化功労賞を受賞される朗報とも重なり、晴れやかな会となりました。

同窓会の楽しみは、一緒に過ごした仲間たちが学生時代に戻って笑いあえたり、歳を重ねていく姿に感化されて励みになったりすることかもしれない。その時に会っていい先輩、後輩の皆さんは、起業、書家、企業勤務、他大学、小・中・高等学校等の教育現場、出版社、ゲーム開発者、写真家等各界で活躍していますが、同窓会というだけで瞬く間に共有感情が湧くと同時に、良い刺激を与えてくださいます。現役生から大藏先生までの年齢差は約50歳。これは狂言研究会創部52年の歴史といえます。

現在は、宮本昇さん（文59）、榎本元さん（文64）、上田圭輔さん（文78）の3人が大藏先生に弟子入りして伝統芸能を継承しています。宮本さん



大学1号館13階にて

榎本さんは、多くの舞台で活躍されていて今年の5月27日（日）国立能楽堂での「吉次郎狂言会」でも、舞台に登場します（詳細は吉次郎家後援会HPをご覧ください）。

狂言研究会の仲間たちと出合い、自分を育ててくれたこのクラブで教員として顧問を担当させて頂けると、心から幸せで感謝の気持ちを持つとともに、少しでもお返しできるように初心を忘れないで精進したいと、あらためて実感しました。

最後にこの場をお借りしまして、同窓会を開催するにあたり松苓会からご支援賜りましたこと、心から御礼申し上げます。（文学部教授）

会員からの便り

古里の風景が燃えて

「糸魚川、今、火事です」
小川英子（文40）



相模原の自宅で、Tさんからの電話を受けたのは、12月22日の昼頃だった。「ご存知とは思いますが」といわれたが、テレビをつけていなかったのだから知らなかった。

火元は広小路のラーメン店だという。私の実家のある本町とはかなりの距離がある。両親はすでに亡く、空き家となっているので近所のTさんは心配して、よく連絡をくれる。

「大丈夫とは思うけど」といって、Tさんは電話を切った。ただ、「今日は風が強いので」といったのは気になった。

それから先は報道のとおりである。

強風にあおられ、火の塊が飛び、あれよあれよというまに延焼していった。空撮で本町は映るが、黒煙の下で我が家がどうなっているのか、まったくわからない。鎮圧されたとの連絡が入り、類焼を免れたと知ったのも、親戚の無事を確かめたのも、夜になってからだ。

鎮火は翌日。30時間燃え続け、145世帯が焼けだされ、147棟が焼損した。避難勧告が解除になり、停電も回復した25日の夕方、北陸新幹線に乗った。

夜の糸魚川駅におりたったとき、駅前商店街の風景はいつもと同じだった。駅前も被災したように聞いていたのとはっとしたが、そこを通りぬけ、本町通りに近づいていくうちにもう焼け焦げた匂いが漂ってくる。そして本町通り商店街にはいると、投光器の明かりの範囲以外は闇に沈んでいた。立ち入り禁止のロープが張られ、警備員が立っている。問われる前に、「家へ」といつていた。

「この先に家があるので、帰りたいんです」

この商店街の中で生まれ、育ったのだ、大学に行くまでの18年間――

「どうぞ」と警備員はロープをはずし、「危ないので、道の真ん中を通ってください」と気づかってくれた。

通りの両側の店も雁木も焼け落ちて瓦礫となり、火勢が強かったので柱も残っていない。散乱したガラスの破片が光っていた。

人どおりのまったくない道路を歩いていくと、我が家の周辺だけが焼け残っている。シャッターをあけるとかすかに煙の匂いがした。

ポストンバッグを居間に置いたあと、私はもう一度外に出た。自分の古里がどうなっているか、確かめなかった。惨状をこの眼で見なければならぬと思い定めていた。

本町通りを海に向かって歩き、浜町の焼け跡を見て、また駅前に戻り、広小路の火元の方までいったが、その路地へ入る道は封鎖されていて、警備員に止められた。

はるか先まで見渡せるというのが、まず衝撃だった。広い範囲が焼け野原となり、そのなかに銀行の建物がぼつりぼつりと残っている。その外壁にも炎の迫った跡がある。

胸の内には熱いものがこみあげてくるのだが、涙は流れなかった。これはうそだ、こんな風景はないと頭が現実を認めないでいる。

今、この文章を書くとしても見たはずのものを思いだせない。夜空を見あげたはずなのに月の形も覚えていない。覚悟していたはずなのに、

ただオロオロと歩きまわっただけだった。

翌日は親戚の間を見舞いに回り、次の日から2日間だけだったが、休憩所としてお茶を用意し、トイレ貸しますの貼り紙を出した。

自宅で正月を正月らしくなく過ごし、それから毎月、糸魚川に通って実家を休憩所として開け、「糸魚川に春よ来い」と題したイベントを開いた。豆まき、ひな人形の展示、春祭り……

また、12月が巡り来る。仮営業をしている店や新しく建て始めた店もある一方、廃業したところや他での開業を選んだところもある。復興は容易ではない。しかし、自分にできる手伝いをするしかないと思っている。

〈児童文学作家。平成3年「雲の子水の子」でフェリシモ大賞優秀賞、平成5年「ピアニャン」で講談社児童文学新人賞、平成22年「くらひめさま」で第16回児童文学ファンタジー大賞奨励賞を受賞。著書はほかに『山ばあばと影オオカミ』（新日本出版社）『あけちゃダメ』（同）『けむり馬に乗って』少年シェイクスピアの冒険』（叢文社）など多数。書評サイトの「シミルボン」で連載中。児童文学者協会会員。現在、生家を利用した「糸魚川の町屋文化を守り伝える会」代表。〉

日韓親善 人と人とのつながり

木村京子（文44）

昨年10月、朝鮮半島情勢が不安定な中、ソウルで行われた「創立40周年記念 韓日・日韓女性親善協会」の合同総会に出席しました。

私は、卒業後環境省に奉職し、退職後は社団法人に勤務する傍らボランティアとして「日韓女性親善協会」の専務理事をしています。

韓国との出会いは、2002年に（ZEP）親善大使の加藤登紀子さん（歌手）の随行で、現地のZSOの方々（歌手）の交流しつつ釜山からソウルまで11日間の出張をした事でした。

その2年後の2004年、小池百合子環境大臣から、日韓連携温暖化防止キャンペーンを企画せよとの指示を受け1人でソウルに出張しましたが、言葉も分からない所での交渉や生活は、孤独感の中自分をじつくり見つめなおす好機となりました。エネルギーシシユで情の濃い人達に囲まれる安心感と開放感。仕事で煮詰まると、ふらっとソウルの知らない街を彷徨い歩く。これが一番のリフレッシュになりました。



東日本大震災の1週間後にソウルを訪れた際、日本に募金を送ると言う「韓日女性親善協会」の役員の方々と知り合い、日本側の会長が、元環境大臣の森山眞弓先生であったことからお手伝いとして始まった活動ですが、その中で二松の名誉教授である呉英元先生とも巡り合い、「同門」とおっしゃって、親善のため多くの方々をご紹介いただいています。

仕事や旅を通して知り合った韓国の多くの友人達や、定宿の韓屋（古民家）のご主人夫妻。互いの言葉はたどたどしくても、同じ鍋のチゲをつつき、ソジュを酌み交わしながらのざつぐばらんな意見交換（時には激論）を重ねていくうち、やはり人間同士の理解は、顔と顔を合わせて話すこと、会う事を重ねて行くこと、これが一番大切だと思ふようになりました。桜が咲いたのでお花見、暮れには忘年会、我々と同じように仲間を集って情を温め合う。近い感性を持った韓国の人に、皆さんもぜひ一度声を掛けてみて下さい。

評価は人物次第

堀井泰蔵（文55）

92年国文卒業生です。縁あって投稿させていただくことになりました。

福岡県ご在住の松苓会員 是本信義・真知子（文34）ご夫妻（ご主人は元航空自衛官で特別会員）からご紹介いただき筆を執った次第です。

陸上自衛隊に奉職して28年余。現在は第5旅団長として、北海道の3分の1の地域を担当するとともに、南西防衛や弾道ミサイル対処及び大規模震災等への対応、加えて国連PKO等への派遣待機といった任務に取り組んでいます（HPご参照ください）。

卒業当時は、優秀な学生はほとんど教員等の職に就く時代にあつて、落ちこぼれの小生は何を思ったか周囲の反対を押し切つて、陸上自衛隊幹部候補生として入隊。冷戦期の北海道勤務を振り出しに、全国各地で勤務しました。

その間、上代ゼミの同級生であった妻と結婚し、3人の子供にも恵まれました。

仕事では、大阪・秋田・鹿児島・茨城の部隊で部隊指揮官を勤め、阪神淡路大震災、東日本大震災、奄美大島や鬼怒川豪雨災害などの災害派遣にも従事しました。

また、大学に程近い市ヶ谷の防衛省陸上幕僚監部で10年ほど勤務し、年度予算、報道の担当、ロジスティックス担当班



長、運用担当課長としてゴラン高原・ハイチ・南スーダン国連PKO、ジブチ海賊対処、国際緊急援助隊、二国間・多国間協力事業、弾道ミサイル防衛に携わり、決して観光で行きたいとは思わないような国の政府・軍や、国連本部・国際機関を訪れて調整・交渉を行う仕事を主に行っていました。

自衛隊では、一般大学出身者は少なく、特に中堅幹部（2・3等陸佐）から高級幹部（将官）になると、ほぼ全て防衛大学校出身者が占めていますが、自衛隊は出身大学に関わらず、人物を実績・能力・伸展性で純粹に評価・登用しています。

二松學舎大学は国際政治経済学部も開設されたとのこと、是非後輩の皆さんに我が職場の門をたたいていただけたらと期待しております。

学ぶ楽しさを知る

岡崎照子（文85）

私は昨年3月に卒業したばかりですが、もう大学で学んだ日々を懐かしんでいます。50代で東京に住まいを移しての大学生活は、正直たいへんでした。しかし、学ぶ喜びを知り夢中で過ごした4年は充実し、私の人生は豊かになりました。

そもそも、私がなぜ社会人入試を受験し、大学で学ぼうと思ったのかといいますと――。

私は平成17年の夏、中学3年生の長女を交通事故で亡くしました。人

の役に立つ仕事に就くことを夢見ていた娘を奪われ、私は生きる意味を失いました。しかし、長い絶望の暗闇の中、残された者は生きていくしかないことに気づきました。娘のために何ができるのか……。辿り着いた答えは、勉強が好きだった娘に代わり、私が大学で学ぶことでした。

そして入学、授業は発見の連続でした。故郷福島県会津地方の方言を取り上げた卒論では、知りたいことが次々繋がり、胸躍る楽しさを覚えました。現在は会津に戻り、命の大切さを伝える講演活動と、図書館司書の資格取得を目指し勉強をしています。

講演活動は平成21年、交通事故遺族が立ち上げたNPO加入をきっかけに、福島県警から依頼を受けて始まりました。中高生に向け、娘を失った母親の立場から「命の授業」を行うものです。ある時「死にたい

と思うのを止めることにした」と書かれた感想をもらいました。改めて私が話す意味を考え、若い

人の真剣な眼差しに応えなければと思います。



た。

在学中も授業の合間を縫って、警視庁や福島県、山梨県からの依頼を受け、講演を行いました。授業中に、中洲講堂で学生の皆さんを前に、講演の内容を話す機会をいただいたこともありました。「生きていくって辛いことだよ」これからも、私の言葉で伝え続けたいと考えています。

卒業に際し、東京新聞と地元新聞社の取材を受け、私の学生生活と講演活動が記事になり掲載されました。多くの方が関心を寄せてくださり、良い卒業記念となりました。



福島民報（平成 29 年 3 月 17 日付）

お世話になりました島田泰子先生、関わってくださいました先生方、島田ゼミの皆さん、ありがとうございました。今後も精一杯頑張ります。また先生方の講義をお聴きできる機会があることを願っております。

（福島県会津若松市在住）

松苓会報原稿募集

会員相互の交流、情報交換の場を積極的に提供するため、会員から原稿を募集しています。

内容は、会員の近況報告（例えば、こんな活動をしている、仕事をしている、書道などの「個展を開催する」「開催した」「受賞した」）、母校や恩師の思い出、漢詩、短歌、俳句などの文芸作品。同期会、ゼミ会、クラス会、クラブOB・OG会を開催する、開催したなど。

字数は、800字程度まで。短信（50字位）でもかまいません。

締切 特に定めません。会報は年2回（10月、3月）発行しておりますので、適宜掲載いたします。

住所変更等があったら届け出を

住所変更や改姓等があった場合は、早めにメール、はがき、電話等で松苓会本部にお届けください。

4月は異動が多い時期です。変更届けは必ずお出しください。松苓会報やホームカミングデーの案内など、松苓会からの郵便物を確実にお届けしたいと存じます。

佐佐木鍾三郎顧問を偲んで



松苓会顧問、学校法人二松學舎元理事長、顧問の佐佐木鍾三郎先生が平成29

年9月19日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

先生の略歴は、大正12年6月4日生。旧制水戸中学校卒業後、昭和17年4月二松學舎専門学校に入学。同年9月 戦時繰り上げ卒業（専15）。復員後の昭和22年、二松學舎専門学校に職員として奉職。昭和23年3月 附属高等学校教諭、その後昭和30年代は大学事務職員を兼務（教務・学生課長補佐、学生課長等歴任）。昭和41年4月 大学非常勤講師（兼務）。昭和44年 附属高等学校教頭、昭和57年9月 同学校校長。昭和59年9月、附属沼南高等学校校長。昭和63年9月 二松學舎大学事務局長。平成元年10月 学校法人二松學舎常任理事。平成3年9月 学校法人二松學舎理事長（平成7年8月まで）。平成7年9月 学校法人二松學舎顧問、附属高等学校名誉校長。

宮越 堯様（故佐佐木顧問のご親戚）から、松苓会に20万円のご寄付がありました。厚く御礼申し上げます。

佐佐木鍾三郎先生の思い出

宮本義孝（文32）

附属高校で教育実習をしていた時のことである。

授業を終えて戻ったら廊下で生徒達がワイワイ騒いでいる。見ると、いつもなら賑わっているはずの職員室はがらんとしたまま、中に、着流しの上の尻を載せて凄んでいる。机の前で、若い教師一人が、身を固くして座っていた。この異様な雰囲気でも中に入れないのだ。

私は借りた教材を返すふりをして、入って様子を伺うと、青年ヤクザは、「先生はそんなに俺のことが憎かったんか」と言う。納得した。つまり、退学させられた生徒がヤクザになって担任だった先生に因縁をつけにきたのである。

それで教材を置いて出ようとしたら、職員室の中にもう一人先生のいることに気づいた。

佐佐木鍾三郎先生だった。

先生はまるで何事もないかのように机に向かって仕事をづづけている。緊迫した雰囲気の中で、ずいぶん腹の据わった先生だと感心した。

その後、私は実習生の控室に戻ったので知らないが、何か起きたと云う話は聞かなかった。で、多分、無事に終わったのだと思う。

それから二十年ほど経って、私も教師になり管理職にも就くようになった。

その頃になって、あの時の先生の

本当の気持が分かったような気がする。

先生は何をするわけでもない。ただそこにいただけだ。

けれど、それだけでヤクザ青年は、凄む以上、何もできない。また、若い教師も側に先生がいるだけで心強かったのだと思う。

私が教師になって常に心掛けたことは「W I T H 共に在る」と云うことだ。困っている人の側にいる。その人を見守っているということだ。

私はこれを、教育学、教師論から学んだのではない。あの時の佐佐木先生の在り方から学んだのだと思っている。（岩手県支部長）

佐佐木鍾三郎先生の思い出

山口洋子（文54）

私が佐佐木鍾三郎先生にお世話になりましたのは、昭和61年4月に附属沼南高校（現柏高校）に勤務し始めた頃からです。当時はよく先生からお声をかけていただき、国語科の先生方と一緒に上野の本牧亭に女流義太夫を聴きに掛けました。常連さんも多く、本学の卒業生や先生を慕ってこられている方もあり、お陰で、先輩方を多く紹介して頂きました。会終了後には、本牧亭下の日本料理店「本牧」で稲庭うどんをご馳走になりました。そこでは、義太夫の話はもちろんのこと、人形浄瑠璃、人形の首などの話を伺いました。また、先生は学生の頃、古典劇研究会というサークルを立ち上げ、午後は毎日のように劇場や寄席へ出かけられたということを楽しそうに話され

ていました。

私が大学の庶務課に配属されたときは、先生は法人本部に勤務されておいででした。昼食はいつも愛妻弁当に舌鼓。お茶をお出しするとありがとうとおっしゃってください。その笑顔が懐かしく思い出されます。

また、先生はお土産をお持ちになるときは必ず、その日の出勤者全員にお菓子がわたるよう、人数分を用意されていた。そんな光景も楽しい思い出の一つです。

先生は姿勢が良く、挨拶の角度も物差しで測るほどきちっとされていて、常に落ち着いておられ、そのお姿はご立派で大変尊敬しておりました。

先生の退職後は、義太夫で知り合った本学の卒業生の先輩と二人で先生のご自宅に伺いました。先生は、本学が窮地に追い込まれたとき（昭和30年）、学校を守るため、長い間家に帰らず学校に泊まり込んだことがあったそうです。給料もままならず、辛い時も、奥様のお力添えで乗り越えることができたとのこと。先生と奥様とのあたたかい絆に触れ、ご夫婦が助け合って生きてこられたことの素晴らしさを感じました。

先生は、本学で学び、本学を愛し、本学に貢献され、そして何よりも本学の成長を願っておられました。先生の「二松ファイト！」のお言葉が心に響きます。

私の人生において、この二松學舎に長年勤務出来ていることは、先生が導いてくださったお陰と思っております。心から感謝申し上げます。

（附属図書館図書課長）

『武士が活躍しはじめた、その頃のお話』紹介

二松學舎大学文学部の磯水絵教授・小山聡子教授・大妻女子大学文学部の小井土守敏教授が著作した、『武士が活躍しはじめた、その頃のお話』が、昨年3月に創英社出版・三省堂書店から発行されました。本の表紙に「二松學舎大学の絵本」と記されています。

この絵本の制作は、二松學舎創立140周年の記念事業の一つとして企画され、二松學舎大学附属図書館が所蔵する奈良絵本『保元物語』『平治物語』の挿絵をもとに制作されました。

奈良絵本とは、主に大名や豪商といったお金持ちのために、京都の書肆で、室町時代半ば過ぎから江戸時代前半の16、7世紀に注文制作された、絵入りの豪華な写本のことです。

内容は、「鎮西八郎物語」「悪源太義平物語」「ときわ御前物語」の三編に分かれており、古典文学が苦手な方も、この本を読むと奈良絵本で読む『保元物語』『平治物語』の雰囲気、かなり詳しく知ることができるお薦めの一冊です。



寄付者芳名

平成29年3月1日から平成30年2月末日までにご寄付いただいた方のご芳名を掲載します。(敬称略)

（二口千円）

二百口

宮越 堯

二十口

三嶽 道子 文39

十口

鈴木 久子 文38

廣田 克己 文38

高橋 邦夫 文39

佐藤 修 文41

山崎 正伸 文41

佐久間敦子 文46

五口

田村 勝彦 文38

山崎 将人 文51

小澤 朋子 文51

三口

小林 政明 文39

田丸 勉 文39

須田 靖浩 文56

二口

戸田 浩 文47

須田 美穂 文61

飯野 崇 文66

一口

中里 路子 文61

三井田彩子 文61

松苓会からのご案内

○第23回松苓会定期総会（支部長会議）

平成30年6月9日（土）

○第14回ホームカミングデー

平成30年11月3日（土）（予定）

支部長交代

三重県 小川直紀（文44）

平成29年12月10日付

埼玉県 青木一弥（文47）

平成30年2月5日付

平成13年度以前の卒業生の方へ
終身会員手続きのお願い

松苓会の運営資金は、ほとんどが終身会員の会費で賄われており、終身会費1万円を納入していただく終身会員になり、会報の毎回送付やホームカミングデーの案内が毎年届くようになります。終身会員の手続きをとりえるようよろしくお願いいたします。

寄付金のお願い

松苓会では、会の発展のために会員の皆様に寄付金をお願いをしています。

松苓会の事業推進と財源確保のために、一口千円で寄付金を募っています。ご協力をよろしくお願いいたします。

お詫びと訂正

会報58号に次の誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

2頁の、水戸理事長の挨拶で、

（誤）「1878年（明治10年）」

↓（正）「1877年（明治10年）」

13頁の、落語研究会50周年記念事業報告で、

（誤）「事務局長 松川明弘」

↓（正）「事務局長 松川明弘」

17頁の、更新講習を受講して、

（誤）「各和恵美子」

↓（正）「格和恵美子」

表紙写真

松苓会報の表紙の写真は、現在の二松學舎の姿を見てもらおうと、本館、図書館、2号館、3号館などで表紙を飾ってきました。前号は、新しく植樹された2本の松でした。今回は、創立140周年のさまざまな行事を代表して、夏目漱石アンドロイドに登場願いました。

編集後記

松苓会報59号をお届けします。卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。みなさんの卒業年度は二松學舎大学創立140周年にあたりました。松苓会支部でも三島中洲師墓参が行われました。現在のお墓は、富士霊園内にありますが、元々は上池台にありました。その経緯に関わる中洲の漢詩とその解説を、元学長石川忠久名誉教授が寄稿くださいました。これからも、読み物として楽しんでもらえる会報記事などを入れられたらと願っています。卒業生として松苓会活動に参加して、ご意見やご提案などを賜れば幸いです。

二松學舎大学（松苓会）
ホームページ
松苓会 E-mail

www.nishogakusha-u.ac.jp
shourei@nishogakusha-u.ac.jp

二松學舎
松苓会報
No.59

創刊 昭和62年12月1日
発行 平成30年3月15日
編集 二松學舎松苓会
住所 〒102-8336
東京都千代田区三番町6-16
電話 03-3261-7408
振替口座 00180-5-160343（郵便局払込取扱票）
印刷 ㈱サンセイ

